

ランタン・フラワートレッキング12日間

平成19年8月8日～19日

記録係：15期 舟田 節子

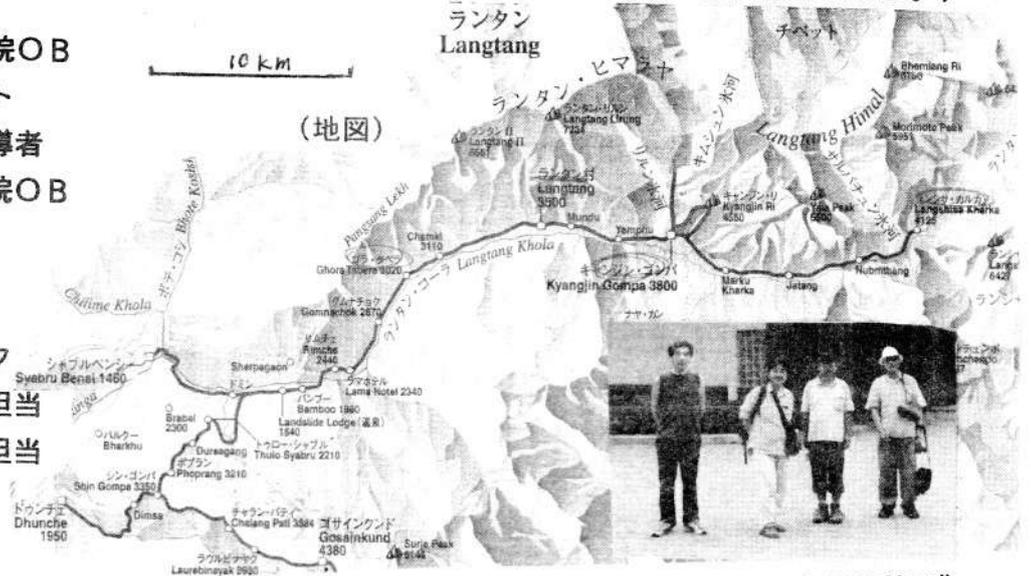
(写真はすべて長岡正利L撮影のもの。
また、記録はご校閲頂きました。)

◆メンバー

長岡 正利	11期	国土地理院OB
上村 人史	11期	日立ソフト
舟田 節子	15期	学習塾指導者
Y	76歳	国土地理院OB

バックアップスタッフ

北 正昭	3期	在バンコク
奥名 正啓	15期	気象通報担当
深井 嘉浩	29期	気象通報担当



《ラディソンホテル前で》

「思い出せる限り書き留める」を趣旨とした原本は24ページに及ぶ物です。限定15部のそれは一部OBには、寄贈・回覧されています。雨期のヒマラヤ紀行は珍しく、それなりの価値があるものの、会報の24ページ分を占有するのは…。よってこれはダイジェスト版です。もし反響が大きければ(?)、HPから原本を見られるように、篤志の方をお願いしてみることになります。(といっても8ページの短縮にすぎず…)

◆プロローグ

「このコースだったら行きたくありません！」
ワンゲルHPに掲載の前日になっての宣言。行き先漠然のまま、お盆の頃に休みが取れるのはどうやら4人となり、その1名の発言であったから、そんな我儘おばさんがキャストイングポートを握ってしまった!?

10日+アルファでの二度目のカラコルムトレッキングは、国内便利用でさらに奥地へ入り込む予定だった。それが発案時よりさらに政情が悪化し、また、めでたく独立起業したベイグ氏(長岡先輩が昔から懇意にしている現地ガイドで、2年前のカラコルムにも同行)にいたっては、彼が私達に同行している間の緊急連絡体勢が大丈夫か?などがあやしかった。かくしてお盆時期の帰国便を確保できるぎりぎりまで待っ

での長岡大本営発表の「厳選コース」は、結局のところ、2年前に毛が生えた程度のコースとなってしまった。パキスタン通といえる長岡先輩にしても、10日間程度の足枷がかかればさして選択肢がないのが、長い長いカラコルムハイウェイの助走を必須とするカラコルム山域なのである。

そこで代替案として浮上したのが、夏のネパール・ランタン谷だった。「お客様は神様…」のツアー会社でもないのに、さっと引っ込め即代替案を提示して下さる先輩には平伏。そのうえツアー会社以上に、もう一つ代替コースもあげて比較検討ポイントが羅列されており、もちろん地図も添付されていた。他のお二人は長岡L以上のLはないと、全幅の信頼での「どこであれ異論なく参加」であって、「夏のランタン谷なら行きたい!ランタン♪ランタン♪」の私の希望が通ってしまった。

もちろん夏のネパールは、雨期の真っ最中であってトレッキングシーズンではない。しかし、日本の高山だって、条件が厳しいから一斉に咲き競う花畑ができる。もっと厳しいヒマラヤなら、もっと華麗に夏が謳歌されるはずだ。そして私は2年前の28日間には満点といえる旅をしたが、それは乾期の風景に限定されていた。

観光とトレッキングシーズンという国全体がよそ行きの顔をしたネパールの方しか、私は見えないのではないだろうか？

「雨期こそそのヒマラヤの花を見たい」「シーズン外れのネパールの素顔が見たい」は、ツアーカタログにさえ載っていないことで、漠然のままの願望としてフワフワと漂っていた。それなのに、ネパール・ランタン谷が浮上したのだ！これ以上の行き先はない！我儘は言うてみるものだ！（…相手によりけりです）

なお、ランタン谷は探険家ティルマンが「世界でもっとも美しい谷」と紹介したことで名高い。（長岡Lによる注釈：昔は簡単にはあちこちに行けなかった。だからティルマンさんも、他の良い所を知らなかったのもそう言った？）ネパールには主なトレッキングエリアとして、エベレスト方面、アンナプルナ方面、ランタン谷の3箇所がある。このうちランタン谷はカトマンズから一番近く、さらにはヘリが熱帯雨林を越えて標高3010mのゴラタベラまで運んでくれるために、時間短縮が出来ることでの人気が高い。一般向け最終宿泊地点キャンジンゴンパは3840mで、高所検診が必要となるものの、ランタン・リルン7225m、ガンチェンボ6387m、ドルジェラクパ6986mといった形のよい山の展望が得られる。さらにはピークアタックをしたい人には、ヤラ・ピーク・サウス5520mがあるという山域である。

今回は雨期だからヘリは飛ばず、熱帯雨林を延々歩いて行く。そして、キャンジンゴンパ（そこまではロッジ泊）より一つ奥のランシサカルカ4125mでのテント泊をプラス。予備日一日を設けての11泊12日間の旅なのだった。

長岡Lは、2年前のカラコルムより標高が高くなることを心配されて、毎日のように微に入り細に入り、高山病対策や、雨期対策をふくめた装備、ルート説明、検診、査証取得の連絡などを送信してきておいでた。パルスオキシメーター（血中酸素濃度計）、ガモフバック（高山病症状回復のための、携帯用全身加圧パンプ）もA社から借りるとともに、衛星電話の手配にその練習。

さらには気象検索サイトも調べて、日本で見ると現地からの衛星電話による定時交信時にそれを連絡してくれる篤志を募集しておいで



《ランタン村の子供達》

た。それはそこそこPCが扱えて、天気図が読めて、多少は時差も気にして連絡体勢をとってくれる人材となる。まず家族となると、これがまた、留守をする我儘な親が、さらにフォローを頼むなど、ちょっとできない相談…。しかし「奥名さん（15期）ならPCバンバン。それに、金大ワングルOB有志のツアー名になってるんだから、バックアップしてもらえます！」と節子は能天気にご指名。もちろん彼からは快諾がきた。それにA社の深井所長（29期）も、チェックしてくれることになった。そのうえ、乗り継ぎ地のバンコクでは、セカンドライフを始めている北先輩（3期）が夕食ご招待をして下さることにもなっていた。

かくして参加者4名ながら、「金大ワングルOB有志」のネーミングに恥じないバックアップを受けて、出発！

◆8月8日（水） ～バンコク

ご近所の手前、金沢を出る時はコソコソと…になるのだが、成田エクスプレスに乗ると、こんなにも多くの人々が国外へ出るのかと驚く。そんな流れに乗って南ウィングKカウンターへ。

リーダー装備を持つ長岡Lは荷物が一つ多い。上村先輩は、トレッキング中にもそのまま本人が担いでいても支障ないような小さめザック。半袖、半ズボン（蛭にやられますよ！）が主体だとそうなるのかしら。今回は、機内禁煙に続き本格禁煙に入る…がかかっているらしい。煙草を一本手にする度、なぜか解説めいた言い訳がついていて、それが繰り返されのがまたお

かしかった。PCを生業とする彼は、長岡Lが送ってくれた地図と、グーグルから取り込んだ地図をアップして、帰国後すぐ旅行記となるようなセッティングを楽しんでいた。地理院OBのYさんは相変わらずお元気。2年前にエベレスト街道のタンポチェで遭遇しているから、3度目の同行のような錯覚がある。2年前以上にリラックスして、出国手続きをとる。

乗り継ぎ地のバンコクはモダンなパイプ屋根が覆い、2年前とは違う。スワンナブームは、昨年9月に開港したばかりの新空港だった。空港本体は何とか完成したものの、空港までのモノレールは間に合わなかったというより、いつ完成するのかわらないと、迎えに出た日本語ガイド嬢は笑いをとった。

北先輩とはホテルのロビーで待ち合わせ。14年前のOB会再興の時には実行委員長としてご尽力いただいた方で、再会できるのが嬉しい。初対面の長岡Lの方は、北先輩の奥様は田村教祖の妹さんなのだの情報に身構えられた(?)ようであったが、北先輩はニヤニヤと「いやあ仲の悪い兄妹で…」と返された。電話を何度もとりついで頂いた奥様にはまだお目にかかっていないけれど、「兄が大変ご迷惑をかけて」と、心配り細かい方だ。そんな奥様は、アジア屈指の都市バンコクに来訪されても居心地悪く、早々帰国されてしまうらしい。

北先輩は、輸入機械のメンテナンス工場の社長を友人から引き継がれたとのことだった。私には細かなご苦労はわからないけれど、実質的に必要とされる援助とそれができるセカンドラ

イフは素敵だなあと思う。ホテル近くの、中華兼タイ海鮮料理店に入った。秋篠宮殿下もご愛用と紹介されたそこは、食べている間にも客が次々と席を埋めていった。ここはリッチ層が来る店にあたるそうだが、そんな成功を謳歌するような談笑が、3階フロアにも溢れんばかり。スパイスの本場とあって、蟹料理もトム・ヤンクンも絶妙の味だった。

店を後にした10時頃も、人通り多く、喧騒溢れる街だった。

◆8月9日(木) ~カトマンドゥ

機内の座席は「窓際を」と頼んでも、4人横一列で確保される。もちろん長岡Lに窓際に座って頂く。機窓から写真を撮れる腕をもち、かつそれがどこかも判るのは彼だけなのだ。私達は、トイレにさっと立ち易い側を喜ぶ現実派だった。

雨期の東南アジアの平野一帯は洪水だらけ。それを機上で憂えても始まらない。ヒマラヤが雲上に聳えてくれたなら…であったが、やはり夏の雲はたくましく各所で盛り上がり、「あれが…」にはならなかった。

トリブヴァン空港に降り立った。政府要人らしきを迎えるらしく、滑走路には綺麗どころがずらりと並んでいた。さっそく長岡Lが膝をついてカメラに収めていた。

迎えてくれたのは見覚えがある…と思ったら、A社カタログに載っている、日本語堪能現地ガイド3人中の一人だった。一週間前には舟を浮かべて往来するほど洪水状態だったが、今日は幸い晴れています…と、ほほえんだ。そして勝手知ったるラディソンホテルに向かう。

ロビーに落ち着いて、さっそく長岡Lはいくつもの現地確認ポイントを詰め始めた。肝心のシャブルベンシまでのバスは、やはり「アクロ」で、崩壊地の向こうに、乗り継ぎバスが用意されているとの返事だった。「悪路とは？」とその程度を聞くと、肩をすくめて「アクロです」と答えた。日本とは基準が違うであろうから問い直しても…。カラコルムでロデオ走行を体験しているから、そうびっくりもしないであろう



《Yさん、上村先輩 北先輩 舟田》

うと他のメンバーも思い出したような視線を交わし合った。

早速市内観光に回るようになった。空は幸いに青い。そして街並みには明らかに観光客が少なかった。ネパール人達が日常のままに往来している。その分物売りだけは、少ない観光客に



《パシュパティナートにたむろするサドゥー》

売り付けようとしつこくまとわりついてきた。「いくら?」「ヤスイ!」の攻勢に、ルピー、ドル、円が混ざり合っ見て物どころではない。

ともあれ、パシュパティナート（ヒンドゥー教寺院）ではお祭りでもあったらしく賑やかで、次から次と遺体が運ばれてきてもいた。よく見れば火葬場にも、大中小(!)があって、薪の量や、群がる人の数も違っていた。ここで茶毘に付され、ガンジス川の支流であるこの川に流されて消えるのが、彼らの至福なのだ。残り火から突き出している腕や、烏が群がり浮かぶ燃え滓が、そう不快でもない。そう信じて死ぬるのは幸せ、そう信じて送り出せる遺族も幸せ…。この国へ来ると、「生きる」とか「死ぬ」とかは仏の手の上でのバタバタにすぎないだろう…が、すうっと得心できる。

チベット仏教第一級の聖地であるポダナートには、寺院を時計回りで巡り歩く人々がいた。やや憑かれたように、立ち止まっている人との

衝突も意に介さない。五体倒地に励む人もいる。森羅万象を見通すという大目玉がそれらの人々を見下ろし、経文を刷った五色の旗（タルチヨー）が縦横に張り巡らされて、その隙間に夏空が広がっている。私達観光客は見えないがごとしだ。

しかし、さすがに聖地をとりまく土産物屋はそうではない。私が「本物のタンカ（仏画）を探してるんです」と言うと、Yさんが「確かこのあたりに工房があった」と言う。たまたま足を停めたタンカ店で、あれよのまに奥に連れ込まれた。店の二階が工房になっていて、刺繍台のようにキャンパスをピンピンに縫い留めて、若者達が面相筆で描いている。中央の一番条件のよい採光の元に座って大作を描いているのが国宝級の女史とのことで、他はその弟子だということだった。売り物もそのようにランク付けされていた。様々な絵柄があったものの、円盤の中に幾何紋が埋まった物が最高位の宇宙の真理を描いた曼陀羅になるらしい。

迷いに迷って、値段では粘って、最後のスワヤンプナートに回れたのは夕暮になってしまった。ここにはカトマンドゥ盆地が大湖であった時、その一角を文殊菩薩が断ち割った後で最初に現われた丘…の伝説がある。そのとおりに盆地全体が見渡せる。長い雨の後の晴天とあって、スモッグは消えうせ、遠望のきく街並が広がっていた。

◆8月10日（金） ～シャブルベンシ1430m

朝のロビーで、サーダーとコックの挨拶を受ける。日本語はコックが少し…とのことだった。ホテルに横付けされたバスには他のスタッフ達が乗り込んでいた。

朝は喧騒に拍車がかかる。警笛を鳴らしまくっての縫うような運転は、ふと止まり、引き返して、露店通りに下がり止まった。どうやら生ま物の仕入れと、そこでの居住者が追加されたらしい。そんな時も長岡しは、さっさと降りて、撮影三昧である。

エンジンがかかり、街並を抜け、丘陵地へ。消費地に近いこのあたりは見事な段々畑、いや棚田だ。稲の丈は短く、どうやら二度目の稲のようだ。隣に座ったナムカ君は、ちょっと欧米系の顔立ちで、おじさんであるサーダーとは、



《唯一拝めた高峰 ガネッシュヒマール》

ドイツのお客を専門にしているらしい。「英語はまあまあ、日本語はほんのちょっと。どれも話す方は簡単だけれど（トレッキング中の必要会話は限られている）、文字の読み書きが苦手、勉強している」と言った。展望のよいカカニの丘近くを走る。雨期の今日、空は青いが、眼下の谷は雲で埋まり始め、薄いガスがベールのごとく視界をさえぎっている。そのガスがすうっと流れて、高峰が突然浮かんだ。ガネッシュヒマール！山が見えなくてもいい…とやってきたが、見えた方がいいに決まっている。やっぱりすごい！写真になる！

バスはさらに谷を縫い、高度をあげていく。時々民家が出てきて、またひたすら山また山になる。そんな山奥の平坦地に家が密集して、バザール（市場街）が現われる。トリスリバザールが今日の昼食地点。入った大衆食堂で、スタッフの一部はダルパート…カレー風の豆スープ（ダル）とご飯（パート）…を注文していたが、客の私達は奥の小部屋に案内された。まだ初日とあって、予約してあったのであろうカマンドゥ市内和食店の和風弁当が並べられた。

外へ出ると、炎天の下、男も女も賑やかに行き交っている。バザール以外、工場があるわけでもなし、会社があるわけでもなし…。貨幣経済にさせてご縁がなければ、もてあます時間が残る。見るからに暇そう…と、それをわざわざ見に来た私達。

そこを出れば、またも時折民家が現われる山合いを縫い進む。斜面を利用して石を積み上げた家屋に住み、雑草だらけのトウモロコシ畝から収穫し、水にも恵まれた亜熱帯地方の丘陵地

帯は、薪も牛に与える草も周囲から確保できる。貧しいけれど、どこに小屋を堀立てても、とりあえず生きてはいける。どんなに離れた粗末な一軒家の前にも、子供の姿があった。巣を作り、子供を産み育て…これが生き物の本能に忠実な生き方だと、こんな所で感じ入る。ランタンが著名なトレッキングエリアといったところで、ヘリはこれら村々の上を飛び過ぎてしまう。ヘリが飛べなければ観光客は入ってはこない。時間が止まったままといえるネパールの山村がここにはあった。

そんな周囲と場違いに延びる基幹道路は、どこかの国の援助でつけられたのだろうが、メンテナンスの費用までは出てこないものだ。乗り継ぎ点はどこなのかとハラハラしていると、「ガタン」の後に運転手は振り返り、バスを路肩に停めた。途中で底をすった時にうけたダメージが、ここへきて…ガソリントankを支えるU字型のバーが垂れ下がっていた。ワイワイガヤガヤの後、タンクは床穴と窓を利用し、荷縄で大巻きにされて固定された。応急処置の根性には脱帽ながら、さてどこでギブアップかとお尻は落ち着かない。

それでも無事乗り継ぎ点にたどりついた。Uターン用はかなり手前に停まったのだが、堀立て茶店が並び、声掛けを待つポーター達がたむろしている。

途中の村で、二人のポーターが追加雇用されていた。彼らも混ぜて荷造りがなされている間に、客である私達は歩き始める。霧雨状のガスで遠くまで見えない。路面のほとんどが崩れ去った地点を、これじゃあ仕方がないと通過したが、結局大小7箇所、約3キロに渡って、土砂崩れが起こっていた。「アクロ」…よほどの援助がなければ補修は望めない。

またも茶店がでてきて、そこが乗り継ぎ点であったが、バスは？いない。一旦通り過ぎてしまったトラック…インド製のTATA（大型トラック）がそれだと言われて戻る。Yさんと私は好待遇で運転席に乗せてもらえたのだが、中央に座ったYさんは捕まり所もなくギアチェンジの度右脚を持ち上げるはめになり、私はひっかかっているだけのドアレバーをずっと押さえっぱなしになった。まさにアクロで、岩盤が剥



《トラック荷台での品定め?》

出しになり、滝にもなった道…日本なら絶対通行止めになっている道を、ふかし走る。大型だからカラコルムでのジープよりはましともいえたが、まさに全身マッサージの大揺れだ。大きな町ドンチェでそれは停まり、スペアタイヤの補修を始めた。最後まで無事走ってくれるだろうか?

カメラを出す気にもなれない私をよそに、長岡しはまたさっと荷台から降りて、雨上がりの町と人を撮影中。再び始動したそれは、チャーターかと思っていたのに、途中次々と客を拾い、その人選もまちまち…というかあきらかに女性にえこひいき。そして後ろに乗った上村、長岡先輩は、しっかり「荷台の品定め」をやっていて撮影もしたらしい。美女同士の張り合いがなかなか見物だったと語った。そんな異国の美女に気をとられていたせいか（不審な荷物の上に詰め込まれたのと大揺れで）、上村先輩は早くも、靴下を血で染めていた。

トラバースから川岸におりるつづら折りのアクロも、かなり手に汗握ったが、トリスリ川を無事渡り、ようやくエンジンが停まった。谷間のシャブルベンシもバザールで、布屋、雑貨屋、食品店が道の両脇に並んでいる。スタッフ達が荷を運び入れているのは小綺麗なロッジだ。さっき渡った橋の所に発電所があり、電気が使え、お湯も出る。デジカメの充電に安堵した長岡しだったが、すでにSDカードの残量がやばいそうだ。そりゃそうでしょう! あんなに撮ってるんだから…。私のスペアを供出する。いい写真を後で分けてもらう方がずっとラクチン。年々向上心のなくなる私…。

◆8月11日(土) ～ラマホテル2435m

アクロも無事通過、いよいよ徒歩でのトレッキング開始ということで、コースチェックを行った。ラマホテルまで、左岸の丘陵を越えるコースと、右岸のほぼトラバースで上がるコースの二つがある。もちろん登りは、高低差の少ない後者を取りたかった。

ところがそんなコースはなく、そのかわりランタン・コーラの左岸に、川に沿った道があるのだという。ならば川の傾斜で登っていけるのだから、楽だ。

だがもっと大変なことが発覚。最終宿泊地点はランシサカルカであったのに、ロッジのないそこはテント泊まりであったのに、サーダーの持つ手配書に、テントの記述がない。慎重な長岡しは、A社の英文手配書と、それへの返信の現地ツアー会社の手配書も持参してきていた。サーダーが手にしていたのは、ごくごく一般コースとしてのキャンジンゴンバを終点とし、すべてロッジ泊まりというものであった。だから装備項目にテントの記載がない。

サーダーは2通を見比べ肩をすくめて“*What shall we do?*”と言った。

もちろんテントを使うことになるのは、全てが順調に行った場合のみであったし、この手配ミスはサーダーの責任ではなかった。結果的には一般行程通りの進捗となった。76歳を含めたメンバー構成を見て、現地会社がそこまで読み切ったものかまではわからない。

ともあれ、やや微妙な雰囲気ですトレッキング初日は始まった。車道脇のちょっとした階段を降り、集落外れで許可証のチェックをうける。目前には、ポーテ・コシとランタン・コーラの合流点があり、ここから下流はトリスリ川と名前が変わる。まず吊橋でポーテ・コシを渡り、車道ができる前からある本村のシャブルベンシを通過。さらにランタン・コーラを渡ってそのまま左岸を伝っていくのである。

車道沿いにできた新村はバザールとなっているが、そんな発展からとり残された本村の方には、軒先迫る貧しい長屋が並んでいた。雨期の雨と氷河の融水を集めて、轟音あげる川をまたげば、そこからは草いきれの道が延びる。雲母を多量に含んだ石はギラギラと陽光をはね返し

、汗がしたたる。もうYさんの足は止まりがちになった。薄着になるよう勧め、「もっとゆっくり…」とトップのナムカに指示する。ナムカ君はスローに付き合うべく、ドイツ語のガイド本を手にしてチラチラとお勉強。親しくなった客がプレゼントしてくれたそうで、それが彼にはガイド語学の教科書なのだった。

支流をまたぐ吊橋を渡った先のロッジで小休止。ネパール人は一日2食だから、ポーター達はそこで朝食をとったらしかった。格子柄のショールを頭からかぶったり、あるいは荷物とのクッション材にしている女性と、おかつば頭で結構イケメンの青年と、右目が白濁した男性…よく笑いかけてくる彼に正面からの笑顔で返すのにはやや時間が必要だった。あとの二人はサーダーが車中から声を掛けて現地雇用した地元住人で、重い荷が割り当てられていた。わめき合うような交渉成立の後、彼らは帰宅して当分留守にすると家人に声を掛けてきたのだろうが、それで増えた手荷物は額紐と小布だけだった。一人は裸足でもあった。

ロッジの老女が椅子を勧めてくれ、自分は庭先で織物の続きを始めた。彼女の喉には古いネパールガイド本に乗っていた写真どおりに、大きな瘤ができていた。それにはヨード不足による風土病と出ていた。彼女の頭上にランタン・コーラの奥には高峰が見えた。このまま好天が続いてほしいものだが…。

傘は思わぬ場所に出すことになった。一枚岩から張り出させた道の、さらに先では滝が頭上から覆い流れ落ちており、濡れ鼠が避けられない難所になっていたのだ。そこからあがった所



《晴れ間の庭で、機織りに励む老女》

が昼食地点のランドスライドロッジ。対岸に二人ほど入れる温泉があるそうだ。人通りが多いとも思えないのに、新しいロッジを建築中だった。

さらに先のバンブーロッジでは広くなった川原に数軒のロッジがあり、空から降ってくるような滝が対岸に見られた。しかしどのロッジも閉まっている。シーズンオフだからだが、かえってさっきの昼食地点が営業していたことの方が不思議だ。

谷全体はやや広くなり、広くなった分を熱帯雨林が覆い始めた。旺盛な光合成と菌活動。うっそうと垂れるシダ植物にシッキムの旅を思い出すが、あの時のようなシッキム訛りで鳴く鳥の声はない。というより、盛り上がるばかりの大水流の轟音が話し声をもかき消してしまう。インド洋からの水蒸気が、太陽エネルギーを蓄えて再びインド洋へ還ろうとしている。大地を削り流さんばかりの雄叫びは、時としてしぶきを風に運ばせ、足元も揺れている錯覚に陥る。

場違いのような鉄骨橋を渡り、すぐ上の崩壊地をへつると、ようやく道は川からの高度を上げ始めた。さっきまでのイワタバコやミョウガの仲間とは違う、やや高原風情の花が出始める。崖には黄色の小型のランが咲いていた。

午後の雲が広がり雨がおちてくる。下山してきた現地男女は、傘なし。我が隊もナムカ君が長傘、サーダーが折畳み傘のみで、両手を額紐に添えるポーターも、キッチンボーイも、傘などささない。しかし、荷物だけはさっと大判ビニルをかけて雨対応をする。

さらにうっそうとした熱帯雨林に入る。先程より気温が下がり、シダ類よりは苔類がびっしり。頭上を覆われて、3時といえども夕方気分だ。展望もなく、Yさんの高度計の「2200を越えた」「気圧が下がってきているからずれているかも」が、気晴らしの話題になる。

木製のゲートをくぐった所がラマホテル。蔓をからませて、朱と白の花を咲かせているのはインゲン豆のよう。庭先のリゾートチェアに座り込む。Y氏ならずとも、歩きはもう結構の気分で、ホットジュースを頂く。あれ、上村さん、紫煙があがってますよ。

来る前におどされた蛭は結局出なかった。「



《今回も出てくれました。感謝！》

これまで良い天気が続いていたので、地中にもぐったのでしょ

う」がば長岡Lの説明だった。左手の煙漂う平屋がダイニングで、ベッドルームは別棟の、段差の大きい階段を登った上だ。他の5軒ばかりのロッジに人影はない。レディファーストで、ホットシャワーを使わせてもらった。鍵はかからず、閉めれば真っ暗、衣類を置くスペースもない。贅沢はいえないのだけれど、ちょっとずつの不便が、少しずつの疲労として蓄まっていく…体力の他に耐力も必要なのが辺境の旅。

食事は毎度撮影記録付き。揚げ菓子の前菜、にんにくスープ、ライスにおかず3品くらいが乗った皿。「ブギョ（いらない）」「アリアリ（少し）」の単語とともに、最初から胃が半分一杯の感覚も思い出す。今回も長岡Lはこまごまと和の副食品を用意してきて下さっている。みんなに奨めたり、半端な使用品の封をしたり、最後にはきちんと食缶に収めて封をしてキッチンボーイに渡す所まで…。余力がなくなり、ますますズボラになり、気配りもできなくなっていく私はここでも平伏。

オーナーは、長岡Lにデキモノの薬を無心していた。私は抗生物質を持参してきてはいたけれど、症状に応じての分量が分からないし、薬慣れしていない人に善意のプレゼントとするのも戸惑うものがあった。彼が見せた傷はもうカサブタが張っており、無難に「持っていない」ですませた。

そういえば、ネパール協会内の学校支援をしている人が、学校に救急箱をプレゼントしたことがあったそうだ。近隣の村からも村民がおし

かけ、夜昼なく授業は妨害され、マーキュロなど医薬品は実際どんな使われ方をしたかも不明になったそうだ（説明書をつけてあっても読めない。読まない）。「素人が持ち込んでいいのはせいぜい傷バン。それでも数が限られて騒動の種になるのがオチだから不用」が、善意からの想定外騒動に肝を冷やした彼の結論だった。

◆8月12日（日）～ランタン村3450m

出発直前まで、長岡Lは世界天気図と衛星雲画像をチェックしておいでたらしい。一週間ほど異常な好天をもたらしていたらしいチベット上空の高気圧はずれて、モンスーンの典型的な南東の風が吹き込んでくる…の予報どおりの、しっとりの朝だ。今日は樹林帯を抜けられる。でもそれで、眺めが…とはいかない。

樹高が低くなり、高茎草原がでてきて、フウ口の濃いピンク、キツリフネ風の群生、紫のトガクシショウマ風の花が周囲にあふれ始める。露を光らせて、しっとり濃い色でそれは綺麗。これを期待して来たのだ！

「視線を花の高さにまで下げて、周囲をぼかすとうまく写る」の講釈に続き、ササと余計な葉やゴミ枝をよけて背景を整えられる長岡Lは、ここでも余裕いっぱい。対して私達は、カメラを防水袋から取出しいちいちしゃがむのが結構苦痛で、またも「上手な写真を分けてもらえばいい！」に流れてしまった。そして花に気が紛れるものの、一気に高度をあげる登りが続いた。

登りきり周囲が開けた花の草原は、これがヘリポート？周りに石垣がなく、カルカでもなく不明。さらに進んで背の高いシャクナゲ林を抜けた所が、ゴラタベラ（3010m）だ。昨日から高山病予防にダイヤモンドを飲み始めた私は急いで屋外トイレに走ったが、早くも「夜中に5回行った」の人も出てきていた。知人A氏のスケッチには赤・白のシャクナゲ林とロッジがカラフルに描かれていたし、タルチョーもはためいていたけれど、時期外れとなれば、夏草茂る中にひっそり佇むそれは、廃墟になったばかりか？のように、薄いガスの中で浮かびあがっている。

シャクナゲ林に、サンショのようなとげとげ



《露を光らせるトガクシショウマ風の花》

の灌木が加わる。びっしりの赤い実を上村さんは5粒程試食したらしい。先頭のナムカが、「一個ならOK、二個目からはオエー」と説明している。ヒマラヤンチリという香辛料であるそれは有毒というより、刺激が強いという意味だったようだが、上村さんには後の祭りだった。でも5粒口に出来たほど、おつな味だったらしい。景色が見えなければ、まさに道草を食うことにもなる。

灌木帯を抜け、遠くまで見えはしないが、丘状になり、そこにあるのは兵舎のようだった。ポストでチェックをうけ、申し訳程度の鉄条網を抜ける。ろくに人通りもないのに、ご苦労様だが、こんな時にわざわざ来る方が怪しげな人物であるかもしれない。

ランタン渓谷はさらに広がり、ランタン・コーラの渓谷部もかなり下手に、大きめの沢程度になってきた。パッティ（茶店）前のベンチで大休止をとる。「ティー？」ときかれて注文する。ナムカやサーダーも飲んでいたので、行動食としてのお茶タイムかと思ったら、出発時に、ビール代と同じ額の支払いを請求された。ティーにも現地民価格と、ツアー客価格がある。サーダーがまとめて注文を出せば、あっさり現地民価格になるのに…という話であった。騙された心地がした私達は、次の「ティー？」の時には「ノーサンキュー」にしてしまった。

時間的にはもうランタン村は近い。大吊橋が架かっていた。架けられている脇谷の流れは細く、急峻な崖でもない。緑の斜面を上流にトランプして短い橋を渡れば…あの下に見えているルートで十分だ。こんな無用の長物クラスを

谷の入り口で大々的に架橋するくらいなら、もっと下流のガレ場、それこそあの車道を直す方が優先事項ではないか！しかし、援助というものは、現場事情とは無関係に計画され支給される。もらえる時に、もらえる場所で話がついていく。普通なら迂回せずにすんでよかった…と思うところなのに、ウーン、こんなの無駄！と思いつつ渡ってしまった。

谷はますます広くなり、特に左は氷河がこすり削った剥出しの大岩壁が続く。何本もの滝がかかっているのが、雨期ならではといったところ。そのかなり大きな水流の下には発電所があるようだった。ランタン村は、発電所があるほどに大きな村といえる。左の丘の上にもまず一塊があって、さらに進んだ所にがっしりした石積みのロッジ群がある。むこうで人々が群れているのは学校か集会所のようだ。

道からついと離れて真新しいロッジに入った。右には広い台所、左がダイニングで、ダライラマ14世が祭壇に飾られている。そこで遊んでいる男の子にカメラを向けると、スーパーヒーローのポーズを決めてくれた。

ここのトイレはダイナミックに大きかった。あとに出来るロッジほど設備はよくなる。オフシーズンの今は、きれいなロッジを楽に選べるようだった。そんなトイレの窓からは、赤色の畑が見渡せる。ソバだと分かった。

ダイニングのストーブに薪をくべてもらい、濡れ物や靴を干す。そのためのハンガーやピンチを長岡Lの指示で荷物に入れてあった。ロッジに着いたら着替えて、ストーブの上につすのが日課になっていった。

◆8月13日（月）～キャンジン・ゴンバ3840m

今朝も雲はたれこめているようだ。傘をささなくてもよければひとまずよし。

迷彩服の一個小隊が朝の訓練中のようで、石畳の道を駆け抜けていった。私達はロッジが並ぶ一角を抜けて村内に入っていく。家々は北側を石で覆い、南側は木彫りの三連窓をつけた木造で、ベランダ状の張り出しの下が牛小屋や薪置場になっている。すすけた年代物の家は、こんな湿った時期にはなおのこと朽ちかけた風情に見える。所在なげに、バンダナ髪、シェルパ



《ランタン村の長屋風住居》

ニエプロンの女性が寄り掛かっている。作物干し場になるのであろう石敷きの中庭、セメント工作の水場・洗い場、その間の石垣に挟まれた石畳の道を抜けて丘に上がる。振り返れば、ソバ畑の他に緑の広い牧草地にも囲まれたけっこう大きな集落だ。そんな集落を一周してきた迷彩服にまたすれ違う。そういえば、マオイストも政党と認められて選挙の施行も決まり、政情不安の懸念もなかったのが今回の旅だ。

マニ石を積みあげたチョルテンが現れ、そこからは延々とメンダン（マニ石を並べた石垣）が続く。経文の浮き彫りは風化して、年代物といった印象だ。子供も、薪を担ぐ老婆も、左側歩行を守っている。つまり、歩道が2本きっちりと平行していて、メンダンが中央分離帯になっている。セリ科の白い花を主体に、フウロの赤、アズマギクの紫、ウサギギクの黄がまじる。両脇の谷はもっとU字谷が開いて、低木と草原の交じる緑の斜面に変わりだしている。谷奥にあるはずのガンチェンボなどは見えない。メンダンが途切れたあたりのカルカはフウロや、テガタチドリなどの花に埋まっている。耕作しているわけでもなく、牧草地とも見えない。大岩を壁面に利用したロッジがあり、岩の角には水牛の角が掛けてあった。ティルマンの見た世界一美しい谷とは、夏だったのか、展望のきくトレッキングシーズンだったのか？そのあとはエーデルワイスの絨毯になった。（長岡しの注：夏だったそうです）

マニチェルン（マニ車を回す水車小屋）があった。それがまたぐ沢に、「夏のゴーキョ」の

CDで見たプリムラ・シッキメンシスが群れていた。夏の5000m付近に咲く花なのだろうかと思っていたが、日当たりのよい流れを好む花なのだ。

小綺麗なロッジは、またもお茶を頼んでよいのかどうかかわらず通過する。窓ガラスの多い瀟洒なロッジになりだしていて、トレッキングシーズンならきっと大展望を楽しみつつの昼食ポイントなのだろうと思う。リルン氷河からの流れをわたる。白々とした河原に石がごろごろ広がる。ホワイトアウト状態の中を歩くと、展望がきかないのは当然として、あそこまでの目標もたたず、こんなに来たかの振り返りもできない。めりはりのない、ただただ単調な歩きが続き、頭の中ももやっとガスがたちこめているようだ。そんな中を足の長い欧米人3人がさっさと抜かして行った。

濃いピンクの藜が埋める丘にさしかかる。祈禱旗が立っていて期待をしたが、その先にはまだ平坦な道が延びていた。キッチンボーイ達がホットジュースを運んできてくれ、もう少しのことだった。毎日高峰を見ても飽きるが、ガスばかりはもっと飽きる。長岡しお得意の「この先で何が見えまして…」が出てくるはずもなく、Yさんの高度計の数字が少しは話の種になった。富士山の標高を越えれば、わずかの登りに足が重くなるのもやむをえず…となる。今日は半日行程と喜んだわりに、まだか、まだかの時間が流れる。

石畳風の階段になり、石加工の跡らしきもでてきて、いよいよキャンジン・ゴンバ村は近いとばかりに丘を乗り越すと、ロッジが立ち並んでいた。馬が草を食んでいる。牛ではなく、馬ばかりがロッジの周囲に散らばっている。石垣をまたいで越えて、やや外れにあるロッジに入り、遅めの昼食。連泊だからと、濡れ物をすぐハンガーにひっかけた。

ここでようやく、衛星電話が深井さんにつながった。プラス3時間15分の時間差は、ロッジに到着してから掛けようとする、迷惑時間になってしまう。途中自宅に掛けて繋がることは確かめたものの、当地の天気情報を入れられずじまいで来ていた。私も電話口に出たけれど、

ネパールの山中と日本の会社という距離を、電話は越えていても私自身は越えられていない。何かトンチンカンな応答をしてしまった。

一方奥名さんの方は「この電話は都合で出られません」のメッセージが流れてくるばかりで事情がわからず。衛星電話以前のところで、活用しきれていないことになった。

午後はランタン・リルンの全容を望むことができるという小ピークを登ることになった。明日の支障にならないようにとYさんはバス。

まず、村の名前の起こりでもあるゴンパを訪ねる。しかし、僧侶は下のランタン村に降りていて、鍵がかかっているとのことだった。年代物のゴンパは入口右に木製のマニ車2基があり、そこから内陣に入る戸が施錠されていた。近くの大岩の下を皆が覗きに行ったのは、鍵守でも探しに行ったのかと思ったら、別の修業僧が籠もっていたようだ。

このワンデリングのトップを務めているのが例の片目の男だった。ここでようやく彼がこの隊のサブサダー格であって、ここまではポーターを兼務していたのだと分かった。さらには女性ポーターが彼のワイフで、もっと後にはオカッパ頭の青年が彼女の弟であるともわかった。貴重な現金収入仕事はまず身内で押さえられてしまう。トレッカーがどんなに訪れたとしても、豊かになるのは一部だけだ。

リルン氷河からの轟音あげる流れの右をトラバーストラバースで、標高を上げていく。ガイドに先行してもらいながらも、どうなっている

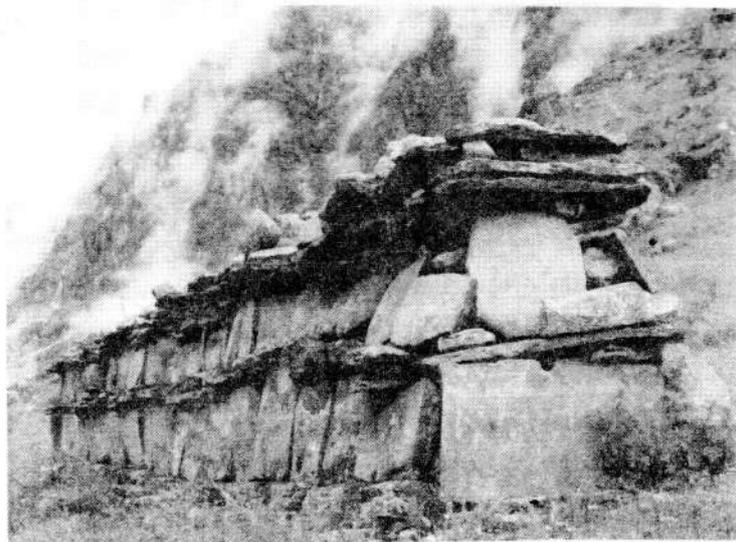
のやらだったが、菓子袋や、壊れた魔法瓶などが落ちていて、一般ワンデリングコースであることを再確認する。標高があがったり、モレーンになったことで、花の種類が変わり始める。

ワンデリングということで、長岡しの持つカメラ専用備品は増えていた。機種を変えレンズを交換してはの悪天にもめげずの撮影で“Are you a photographer?”とサーダーとナムカ君は質問し、“No!”の返事に、かえって納得がいかないようだった。わざわざ雨期に来て、お金も時間も体力も使って、しつこくアングルにもこだわって…それで仕事ではないとなると…。そういう時間やお金の使い方が彼らには理解しがたい。しかし私達もここへ来ると、こんな時間やお金の使い方ができるのは、日本に生まれた御蔭と自覚する。自分の趣味で、自分のお金や時間を使っているまでだが、それがどんなに「日本」に底上げされての豊かさなのかが、わかってしまう。感謝あるのみだ。

傘を出したり、閉じたりの天候は変わらない。このガスでは小ピークへむかってもますます見えなくなるだけ…となって、リルン氷河の末端だけでも見ようとなった。エンドモレーンの一つともいえそうな急斜面を登る。牛に踏まれたりがない分、さらなるお花畑となる。シャジン風、ミネズオウ似…何ということもない灌木までが大輪の黄色の花をびっしりと咲かせて、今は夏、貴重な夏だと告げている。登り詰めての平地をさらに進み、流れは細くなったがまだ氷河の末端にはならない。さらに沢を渡らねばならなくなったところで、渡渉場所を探す彼らに「もういい」のサインを出した。

下りは早い。そして、行きには通らなかったゴンパ上のチョルテンの立つ高台を通過する。村を見下ろすと、建築中のロッジが2軒。円筒状の凝った作りもあり、下はショップだ。どの軒下にも、薪が積み上げられている。シャクナゲの枝のようだ。馬は厩舎に引き上げられていた。

ストーブ燃えるダイニングに入ると、Yさんが「この人が薬が欲しいと言っている」とのこと。その老女は歯痛から頭痛に至ったらしい。無難にセデスを渡す。その家の舅らしき老人は、傘や荷物をよけて長椅子の上に寝場所を作っ



《中央分離帯のようなメンダン》

ていた。客がいる時には火の入るありがたいストーブ…その暖をとる輪ができていた。

◆8月14日（火）ランシサ・カルカ4125m往復
昨日の薬は効いたのかを聞くと、よく効いて彼女はもうランタン村へ出掛けたという。本当に痛かったのか、トレッカーが来ればダメ元で薬を無心するものなのか…それはわからない。物があって当たり前私達は、そんな所まで気が回らないし、持てる物が持たざる物に施すのは彼らには社会通念に当たることだ。

早朝は比較的展望のきく時間帯である。谷奥にガンチェンボが見える。春のネパール展で、A氏の油絵を見ていたから、見分けがつく。あの時の40号の作品に比べ、余りに小さく見える山体だった。ランタン・リルンは？という意外な高さに白い稜線が見えた。二本の幅広い氷河がこちらに下っているのもわかる。しかし頂上部には雲が流れて全容とはいかない。出発を30分遅らせてもらった。しかし、さらに雲が厚くなっただけだった。

ランシサ・カルカへ出発。ワンデリングだからといって、もともと軽量だから、軽くなるといった現象はない。広い草原は、アザミ葉で、花はシオガマ状で、全体としてはルピナス形状の花（マツムシソウ科）であふれている。これらは今しか見られないけれど、そして分かっちゃいるけれど、その場まで来ていて見えない山というのも、やはりしゃくではある。

左から大きく広がる扇状地の河原に出た。下へ下へと下がったが、雨期で豊富な水量の川には手頃な渡渉地が見当らない。もともとサンダル履きのサブサダーはあっさり渡ってしまい、さて靴を脱いだものかと躊躇する私達。サダーはささと革靴を脱ぎ私に背中に乗れという。戻ってきたサブサダーはY氏を負った。私は“I'm too heavy”とは言ってみたものの、乗っかるしかなく、細身のサブサダーも、杖をしっかりとついて5m幅ほどの激流を渡した。上村さんは、待つまでもなしと自分で渡ったのだが、直前で前のめりに転倒。すぐ起き上がり渡りきったものの、しばし茫然自失。私もどう声をかけてよいかわからない。幸い何箇所かの擦り傷以外の怪我はなく、衣類を絞り、行動は



《ヌバマタンの昼食 ここが最高到達地点》
続行となった。やや下手の分流した所で、長岡しとナムカは飛び石づたいに越えており、もっと下流なら…の反省は帰路にはいかされることになった。

広い河原に出て、「ここが昔の飛行場だ」という。特に整地されているわけでもない。対岸はかなり向こうにあって、だだっぴろい。崩れたトーチカがあった。なんらかの空港施設だったのか？その手前にあった2軒のロッジももう石組が残っているだけだった。

岩壁がぐっと迫り、ぎりぎりの所で石を渡って、続きの川岸に入る。ブラックライトがあたったような不思議な色の花が群生するようになる。川の淀む所は、氷河の削り屑をためて、セメントを流したような平地になっている。また川が迫る所は、放牧地の区切りのような石垣が組まれていて乗り越えることになった。続く広い緑の斜面には羊が群れていた。そんなジャタンのカルカに、石積みの小屋は見えるが人陰はない。再び道は流れに接近してその後また高巻き状になる。対岸は赤い石の扇状地になった。こちら側はゆるやかな起伏になり、その先石屋根の散在するあたりにチラチラ見えるのはわが隊のキッチンボーイ達だと分かった。朝の出発を遅らせた間に先行していたのだ。布張り屋根の下では現地民がチーズ作りの最中で、さっそく長岡しを被写体にしてた。

ここがヌバマタン。そして昼食となる。前方の丘はエンドモレーンで、それを越えれば、左からの氷河の末端となり、ランシサ・カルカも

間近なのだという。しかし周囲が見えなければ、そこへ至ってもそうなのでおしまいだ。午後の悪天を予想し、ここで引き返しとする。問題の流れを飛び越えたところで、激しく雨が降りだした。ハイライトといえるワンデリング日も、ただただガスの中歩きで終わった…これがヒマラヤの雨期なのだ。

ロッジのストーブの上に濡れ物を掛けようとして、遠うタオルが増えているのに気付く。日本人客3人…男性2人と女性1人が増えていた。同行しているのは、日本語も英語も達者な、やや気障っぽい雰囲気ガイドだ。ここまでは歩いて登ってきたが明日はヘリで一気にカトマンドゥまで降り、さらに他へ向かうのだという。こんな天気で飛べるのかいな？という思いと、3日分のロッジ代+人件費との差額は実際どれくらいなのだろう？の羨ましい気持ちと…。しかし、お金を積んでも飛べない時は飛べないのだ。

衛星電話に着信記録があった。それは深井さんで、掛け直すと、インドの北に低気圧らしい大きな雲域が発生したという情報だった。なんで奥名さんには掛からないのだろうか？と念のため携帯に掛けてみると、それは繋がった。もう帰途につくのだから「全員無事。予定通り進行中」を連絡した。天気図と現地天気を刻々と照合したら面白い…のかすかな企画は、この程度のお粗末交信の結果、ボツになった。

昨日の老人が、今度はむこうのベンチの上を片付けて、丸くなっていた。

8月15日(水) ~ゴラタベラ 3010m

トンカチ、トンカチ…朝の6時には、ロッジ建築現場からの石割りの音が響いてきた。

「早めに荷物をまとめて…」とあちらのガイドが言っている。対岸の黒い岩峰が今見えてはいるが、晴れてはいない。ゴラタベラまで一気に降りる私達は彼女達に見送られて出発。ただし、ゴンバ見学をしてからだ。ところが、昨日の「早朝なら見せてもらえる」「鍵を預かっている」の話が、またも「僧侶はもう鍵を持って、ランタン村に降りてしまった」になった。約束を入れていたわけでもないから、文句を言う

筋でもない。毎度のこと…くらいだ。

荷物が減ったせいもあり、サブサダーがザックを背負ってトップに立つ。昨日から後ろへ回ったナムカ君は、サダーとよくしゃべっている。やたら「アーチャ」という相槌が聞こえる。ガスで高度がわからなかったのと、辛いことは忘れる…があつて、エッコんなに登っていたんだっけのようにどンドン下る。下りで暑くなってきた以上に、日差しが強くなってきたようだ。久しぶりの青空が広がりだしている。とはいえ谷奥に、雲は垂れたままだ。

日があたれば、ランタン村はのどかな緑の村だ。晴れ晴れと人が出歩いている。歯磨きや洗濯に励む女性達。その後を追う子供達。中庭いっぱい広げられた穀物類。鷹匠の青年がイヌワシの世話をしていて、人が群れている。その撮影は断られた。朽ち掛けた三連窓にも日が当たり、干し物がそこらじゅうにひっかけてある。登りに泊まったロッジで、早めの昼食をとる。二階のトイレを借りに行くと、廊下の突き当たりの窓辺で、女性が糸を紡いでいた。

下村にゴンバがあるとのことで、見学に寄る。最後の喘ぎのように石段を登りつつ、来し方を振り返ると、山頂部は雲に覆われているものの、谷には太陽光があたり、まさに緑濃い谷が延びている。パタパタパタの音…迎えのヘリが晴れ間を縫って飛んできたのだ。ああ、いいなあ…。

このゴンバの木彫り窓もやはり閉じられていた。そこから、チョルテンの前の広場で、脱穀



《脱穀に励むランタン村の人々》

に励む4人の男女が見えた。振り下ろして、叩いて、頭部が回転するだけの単調な道具だ。下りは元の階段へ戻らず、その標高から草原をトラバースして本道に合流した。その途中の空をヘリが戻っていった。ワーイと手を振る。もう一度ランタンへ来ることがあっても、この後の熱帯雨林を再び歩くことはあるまい…。立派な吊橋を片付けの終わったキッチンボーイ達が走り降りていく。フィルムを巻き戻す感覚で、あ、この花撮った、これはヒマラヤンチリだった…と下っていく。雲はたちまち厚くなる。さっきのヘリはまさに1時間足らずのベストチャンスをねらって飛んだことになる。そうでない人達は、蛭の餌食になる道を行くのだ。

再び兵屯地のポストでチェックを受ける。帰路の今度は自分の書いた欄の右端にサインを書くだけでよい。私達が記名した後に増えている入山者は数名だった。

ゴラタペラの直前で、花畑に入り、初めて全員揃った写真を撮った。そこからわずかでロッジ。いい加減な国と思えるわりには、閑散としたルートの中でのロッジは開錠されている。何らかの連絡がとられて、オーナーなり雇われ人が私達の3日分くらいは簡単に歩いて、準備をするのだろう。そのオーナーらしきが隣部屋に手招きするのについていくと、土産物が並べてあった。そしてペンダントに関心を示した長岡しとトルコ石のプレスレットをつまんだYさんがしつこく付きまとわれることになった。言い値を下げて下げて、最後はてっぺんの石が外れているの、紐の滑りが悪いのと、それで突き放したつもりが、次に彼がにっこり迫ってきた時には、てっぺんには紅色の山サンゴが詰められ、紐もそこそこ滑るようになっていた。根負けした二人がついに鴨となる所をあとの二人は笑いをこらえて眺めていた。

そんな商売熱心な彼が運んでくる薪はしっかり湿っていて、なかなか火がつかない。おまけに太陽電池による蛍光灯もろくに輝かない。明るい光が漏れているのは、談笑が聞こえてくるキッチン棟の方だ。こんなダイニングにいてもろくなことはない、早々にベッドルームに引き上げる。ここのトイレはしとしと雨の草原を横切ったの道向こうにある。今夜はサンダルな

んで履けやしない。上村さんが早々に蛭に手をやられたらしい。だからトイレが遠いからといって、途中でやっちゃえ！という選択はましてできないのだった。

◆8月16日(木) ~シャブルベンシ

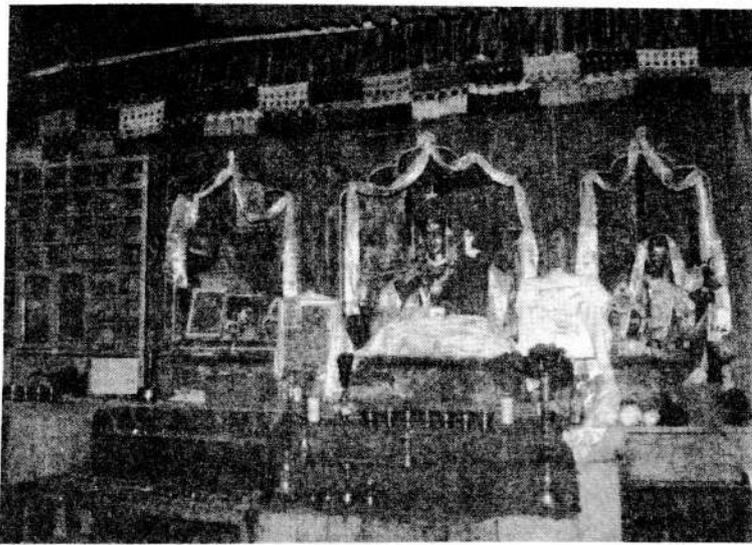
あまりにプレッシャーがかかったせいか、下山となってダイヤモンドの服用を止めたせいか、夜中は起きずにすんだ。「おはようございます」とYさんに挨拶すると、ニコニコと彼が言うには昨晚、トイレ帰りの長岡しとが部屋を間違え、暗闇の中でYさんのシュラフに手を掛けたのだという。「それでね、舟田さんも、間違えられて困ったりしてはいないかと二人で心配していたんだよ」と言う。「いえ、私なんか毎晩ぐっすりです…」と返事したものの、気にならないという返事が信頼にあたるのか、かえって失礼にあたるのかは??

ともあれ、本日は断固、蛭対策がいる。虫除けスプレーをかけたり、虫除けナプキンで拭いたり、スパッツで足元を固めたり…。片足ずつ手法を変えて、検証してみるという人もいた。対して、ナムカやキッチンボーイ達は、生足を曝け出している。

うっそうの林に入り、再び轟音響かせる濁流とともに下へ下へ。サブサーターは奥さんにザックを担がせ自分がポーター役をやっていたが、やがて交換してトップ役になり、さらにYさんのザックをその上に乗せた。

滝が真上から降るようなバンブーロッジで昼食。網竹にビニル掛け屋根の下のテーブルには、庭先の朱色の花が添えられていた。Yさんが上着を脱ぐと「やられてますよ！」下着のV衿の先が血に染まっている。衿先にひよいとひっかかってご馳走様をやったものか…犯人の姿はない。さらに下る。アッ、前のYさんのズボンについているのはゴミではなく蛭だ。払い落とすと「写真を撮ればよかった」…どうせまた出るでしょ。蛭はズガというらしい。

登りの昼食地点にまで降りた。谷奥にシャブルベンシが見えている。あと少し…。登り時にはまぶしかった雲母が、湿っていれば黒っぽい石というだけだ。草原に入り、放牧中の牛3頭に道をよけてもらって、とうとう吊橋を渡っ



《シャブルベンシ本村のゴンバ（僧院）内》

た。

本村の外れにあたる水場では女の子達が洗濯に励んでいる。その先の臭うような長屋の前には夕暮時の一時をたむろする住人達がいる。ゴンバ見学を2度空振りしたサーダーは「このゴンバを見るか」と聞き、番人を呼ばせた。村は古くて汚いが、その分ゴンバは長く崇拝を受けてきた建物のようだった。電気が点されると、仏像は金色に輝き、左右に木版刷り経本がびっしり収まり、壁画も一流で細かく描かれた物だった。わざわざ鍵を開けさせたのだから寄進する。サーダーも、額をつけて礼拝し、お札を挟んでいた。

さらに吊橋を渡り、階段を上って車道へ。ついに近代文明に接触した。あとは明日崩壊地を3キロ歩くだけだ…嬉しい。ロッジにあがり、スパッツをとく…アレ?! 靴下の所でやられている。ホットシャワーをあび、すっきりしてから夕食をとろうとなつて部屋に入る。ふと伸ばした指先に変な感触…いた! さらに脱ぎ掛けると、また1匹落ちてきた。ここは蛍光灯が明るい。確かめて確かめて服をまとい、キョロキョロと視線を走らせて、荷物をかたづけた。しかしすっきりしたと同時にやたらそこらじゅうが痒くなってきた。

食料品店もある町だし、最後の晩だから夕食は豪華。ナムカ達はお酒も買い込んでいた。さっきからポーター達も座っているのは、最後のお別れパーティーや、チップを期待してのことなのだろう。食後には「またきてくださいね」とチョコレートで描かれたシュガークリームケ

ーキが出た。チップの額は長岡LがA社から詳しい相場を聞いてきていた。全体チップとして渡すとピンはねの恐れもあるから、各自に…となると細かい計算と相当の小銭（小額紙幣）が必要で、それは部屋に戻ってからの仕事にすることだった。

夕食前に水洗トイレに流したはずの蛭が、せっせと便器を這い上がってきていた。再度ザーツをやった私だった。

◆8月17日（金） ～カトマンドゥ

朝食後、長岡Lは皆を集めてくれと言い、英語で「皆さんのお陰で無事に、かつ楽しくトレッキングを終えられた」と謝辞を述べた。顔を判別できる私が、ランク分けされたチップの包みを一人ずつ配った。

崩壊地の通過があるからまだ山靴がいいかと、最後の身仕度をやっている時、外から戻ってきたサーダーが言う。「道が崩れて、こちらにはトラックもジープも来ていない。バルクーまで2時間歩いてもらわなければならない。」

昨日ここへ着いた時、例のTATAがエンジンをふかせていた。赤帽のあの時の男が、ちょっと進んでは停まり、札を受け取っては荷台に荷物を乗せていた。それを見て、あのトラックはそれなりに定期便であつて、来る時も特に私達のために手配してあつたわけではなく、こちらが便乗したにすぎないのだと納得したものだ。あれが行ったきりで、シャブルベンシには戻っていないのだという。そういえば、2軒隣に停まっていた白いジープもない…。何があつても驚かないつもりではいるが…ぐちゃぐちゃ靴の紐を観念して締めた。

水力発電所の前を過ぎ、鉄橋をわたり…車道はつづら折りだが、歩道はショートカットで上がって行く。草原、とうもろこし畑、民家の庭先と登りつめて車道へ。そこからは水平車道を歩く。たぶん冠水していた箇所がさらに崩れたのだろう。向こうからも歩いてくる人達がいるが、現地語が話せない私達に情報収集はできない。

バルクーとおぼしき村に着いたが車もなければ人溜りもない。いやあな予感。Yさんについて最後尾にいたサーダーが追い付いてきて、「

橋がだめになり、もっと先まで歩かなければならなくなった」と言った。やっぱり…。どう時間がかかっても、今日はカトマンドゥまで戻ればよいのだ。傘をもて遊びながら、開き直って歩くしかない。こんなことがちょいちょい起きる車道なら、ヘリで飛び越すしかないなあ。話の種も一度で十分だ。

やっと、バスの姿が見えた。歩いてきた限りにおいて、来る時より崩壊したと思える場所はなく、ましてバルクー以降に、ダメになった橋などは見当たらなかった。何を言ったところで…。4時間近く歩いたので乗ったバスもすぐ、乗り換え地点に着いた。茶店が増えている。ここは覚悟していた歩きだ。来る時よりは見通しがきいて、7箇所あった崩壊地は、ずっと上からガレているのがわかり、かつその一帯は岩と砂が混在してズルズル崩れていく地質であることも見てとれた。

向こう側にバスがいるのかも当てにならない…と思ったが、バスは無事待っていた。林立する茶店の前で、サーダーが「ティー？」という。もうくたくたで「ノーサンキュー」という気にもなれず座り込む。疲れて飲む甘いミルクティーはおいしかった。ふと触れた指先の感触…反射的にテーブルクロスの上に手を振ると、落ちたのは蛭だった。Yさんが今度こそとデジカメを構える。よく見ればシャクトリムシのような変わった動きをする生きものだった。ティーの値段を聞くと、コックが手をふり、ようするに行動食のうちとの意味だった。出所はもともと…ながら、サンキューと腰をあげる。

どれだけガタ揺れしても、もうかまわない。トリスリバザールでのダルパート昼食の後は、山を縫い走って、どんどん高度を下げる。現地雇用の二人を下ろし、再び棚田の間も走り抜けて夕暮のカトマンドゥに入ると、すさまじいラッシュ。それも走り抜けてついにラディソンホテルへ。荷物を確かめて最後の握手。

ここまでの車内で、上村さんはナムカと話し込み、彼がまだ学生なこと、オカッパ頭のポーターとは同じ学校の友人であること、短い休暇中のアルバイトであったこと、将来は起業（たぶんトレッキング会社）したいことなどを聞き出していた。その後で「彼は12年生といった

けど、額の脇が結構禿げ上がっていたし…本当の歳はどうなんだろう？」と首を傾げていた。

◆8月18日(土) ~バンコク

バタンを大急ぎ観光して、空港へ。深夜のバンコクで乗り継ぎ帰国。(大幅に省略)

日の出ずる国日本…富士山が雲海に浮かんでいる。ネパールまで出掛けて、ろくに山の見られなかった私達を、日本の富士山が迎えてくれているのだった。

◆エピローグ

そんな富士山も「一度も登らぬ馬鹿。二度登る馬鹿」と言われます。夏のネパールも、一度も見ぬのは惜しく、さりとて二度目は…と言ったところです。二年前には高峰を見飽きた気分になりましたものの、宇宙まで続くような蒼の下の白銀の屏風は、地球という星の最高の芸術品です。その場所まで行ってそれらが見えない日々の中の抜けようといったら…。

雨期も地球が生きている証しですけど、しよせんその地をかすめるに過ぎない凡人は、いわゆるトレッキングシーズンに出掛けて、最高の芸術品を堪能しぬいた方がいいようです。そんな当たり前の結論に至りました。

ヒマラヤの夏は高嶺の花達のもの…。彼女達が恵みの雨と、時折の日差しと、静けさを謳歌しているのです…。(完)

